

早稲田大学審査学位論文

博士（人間科学）

概要書

アメリカにおける日系人差別とユダヤ人  
—1906 年から 1988 年を中心に—

American Jews and Discrimination against  
Japanese Americans, 1906-1988

2019年1月

早稲田大学大学院 人間科学研究科

駒込 希

KOMAGOME, Nozomi

研究指導教員： 森本 豊富 教授

本研究は、1906年から1988年にかけてのアメリカのユダヤ人と日系人の関係について日系人に対する差別へのユダヤ人の反応を手がかりに考察するものである。これまでのアメリカのユダヤ人とほかのエスニック集団との関係史は、アメリカ東部や南部を中心にアフリカ系アメリカ人との関係、その中でも特に、公民権運動とのかかわりから語られてきた。一方、アメリカのユダヤ人と日系人の関係についての先行研究は限られている。それらの多くは日系人の強制収容に対するユダヤ人の反応に焦点をあて、強制収容に対し賛否の態度を示さないかれらの意図的な「沈黙」(Silence)に着目する傾向にある。

本研究では、アメリカの日系人に対する差別へアメリカのユダヤ人がどのような反応を示したのかという観点から両集団のかかわりを考察した上で、アメリカのユダヤ人と日系人の関係史をアメリカのエスニック関係史に位置づけることを試みた。

本研究では、日系人に対する差別をアメリカの日系人に向けられた法的拘束力のある差別、日系人に対する差別へのユダヤ人の反応を個人レベルではなく、集団レベルのものと限定した。また、本研究では、近年、アメリカのユダヤ人のリベラルな活動について、アメリカ社会への順応の優先、自分たちの白人性を保持した上でのリベラルな活動など興味深い議論がなされていることから、リベラリズムという概念に着目した。ここからは、各章の内容にふれる。

まず、第1章では、議論の前提として、統計資料や既存の研究を手がかりにアメリカのユダヤ人や日系人の特徴を詳説し、アメリカ社会におけるかれらの位置づけを概観した。アメリカへ流入したユダヤ系移民は、その多くが東部の大都市に集中し、比類なき社会上昇を遂げた。また、東部ほどの人口の集中はなかったが、アメリカ西部のユダヤ人もまた著しい成功をみせた。一方、人口の大部分がアメリカ西部に集中した日系人は、移住後、激しい排斥にさらされた。

つづく第2章では、カリフォルニア州のユダヤ系新聞ならびに日系新聞の検証を通じて、1906年のサンフランシスコ日本人学童隔離事件、1913年外国人土地法、そして1924年移民法に対するユダヤ人の反応を考察した。ユダヤ系の新聞記事には、これらの差別について日系人を狙った不正義とみなす言説もみられたが、それらの不正義に対しリベラルな活動を行うユダヤ人の姿を確認することはできなかった。一方で、ユダヤ系新聞内には地域の白人集団が日系人に向けていたような激しい排日感情を露わにする記事も見受けられず、ユダヤ人の日系人に対する反応は、地域の白人集団と一線を画すものであったといえる。また、日系の新聞記事には、西部で白人としての地位を享受していたとされたユダヤ人が、アメリカ国内で激しい反ユダヤ主義にさらされている実情が描かれていた。

ホワイテネス研究では、白人として境界線上に置かれた集団が他集団との差異を強調することで自分たちの白人性を主張する行為が報告されている。今回の検証で、ユダヤ人による日系人との差異の強調ととれる新聞記事がいくつか見受けられた。くわえて、ユダヤ人のリベラリズムに関する研究では、アメリカ社会におけるユダヤ人の白人性とかれらのリベラルな活動の間には関連があったとされ、南部で迫害されていたアフリカ系アメリカ人に対し白人性の保持のために、リベラルな活動を行わなかったユダヤ人がいたことが報告されている。このことから、カリフォルニア州のユダヤ人の白人性には揺らぎがあった可能性を指摘することができる。一方で、日系新聞には、アメリカ国内で迫害されながらも生き抜いているユダヤ人を手本としアメリカ社会で上昇しようとする日系人の言説がみられた。日系人にとって、ユダヤ人はアメリカで生き抜くためのロールモデルの役割を果たしていた可能性があることをここでは指摘することができる。

第3章では、日系新聞の検証を通じて、第二次世界大戦期の日系人に対する差別へのユダヤ人の反応を考察した。先行研究では、ユダヤ系の史料分析を中心に強制収容に対する

ユダヤ人の「沈黙」を検証しており、強制収容以外の事例に対するユダヤ人の反応や日系人との接点というものが明らかにされていなかった。日系新聞の検証を通じて、第二次世界大戦期に、外国人登録法などに反対する集会などの場に両集団が居合わせ、ともに活動していたという事実を確認することができた。このような人種や宗教を越えた活動、そして市民的自由を重視した活動は、当時のアメリカ社会への順応を基盤としたユダヤ人のリベラリズムの特徴であった。また、日系新聞のユダヤ人に関する記事の分析を通じてみえてきたのは、アメリカ国内外における激しい反ユダヤ主義であった。そして、そのような反ユダヤ主義を目の当たりにした日系人は、その不正義を非アメリカなるものとし、民主主義の名のもと、明確に批判していた。日系人にとって、反ユダヤ主義と闘うことは、日系人に向けられていた差別と闘うことでもあったのであろう。そのような観点から、第二次世界大戦期のユダヤ人と日系人は、不正義をなくすために活動する共闘関係であった可能性を指摘することができる。

第4章では、アメリカ議会資料ならびにユダヤ系団体の議事録の検証を中心に、1952年移民国籍法に対するユダヤ人の反応を考察した。アメリカのユダヤ系団体は、日系人への帰化権の付与に対して賛同の意を表明するも、1952年移民国籍法にかかわる法案に含まれた国別割当、帰化市民や外国人に対する差別的な条項には反対の意を表明していた。特に、国別割当に関しては、第二次世界大戦の影響で難民と化した南・東欧の人びとを救済するために改正が必要であったことから、その改正のために精力的に活動するユダヤ人の姿を確認することができた。1952年移民国籍法にかかわる法案に反対の意を表明する際、ユダヤ系の団体はアメリカニズムの概念を利用し「非アメリカ的」や「アメリカの伝統に矛盾」といった言葉を用いて対抗していた。ユダヤ系団体によるこのような行為は、この当時のアメリカ社会への順応を基盤としたユダヤ人のリベラリズムの特徴であった。日系人が支持した法案には国別割当、帰化市民や外国人に対する差別的な条項が付随しており、ユダヤ人はこれらが修正された法案の支持を表明したことから、結果として、日系人とユダヤ人との間には事実上の対立構造ができていたことを指摘することができる。

第5章では、アメリカ議会資料の検証を通じて、市民的自由法に対するユダヤ人の反応を考察した。公民権運動後、ユダヤ人のリベラリズムには変化が生じた。それまでのユダヤ人は、アメリカ社会に順応させたリベラリズムを優先していたが、公民権運動後、リベラルな活動を行う際に、より直接的にユダヤ人コミュニティの利益を主張するようになった。しかし、市民的自由法にかかわる議会資料の検証を通じてみえたのは、戦時民間人転住・収容に関する委員会の設置を支援し、市民的自由法に賛成の意を示す証言や意見書の提出を行うことにより、日系人の戦後補償運動を全面的に支援するユダヤ人の姿であった。そして、そこには強制収容体験を通じた両集団間の親密な関係というものが垣間みえた。

アメリカのユダヤ人とほかのエスニック集団の関係史については、アフリカ系アメリカ人とのかかわりに関するものが構築されている。これまで、両集団の関係については、ユダヤ人によるアフリカ系アメリカ人の公民権獲得のための活動に着目する傾向にあったが、近年では、両集団間の亀裂や限界などに焦点をあてた研究も蓄積されてきている。同様に、本研究での検証を通じてみえたのは、日系人に対してもまた、ユダヤ人のリベラリズムは必ずしも無条件に向けられたものではないということである。一方で、ユダヤ人と日系人との関係は、ある種の共闘関係にあったのではないかとすることを指摘することができる。それは、アフリカ系アメリカ人との関係のような長期間にわたる組織立った連携ではない。しかし、日系人の差別に対するユダヤ人の反応を考察してきた中で、20世紀前半から第二次世界大戦までの日系人による反ユダヤ主義へのまなざし、そして1952年移民国籍法から戦後補償運動をめぐる両集団の最終的な目標には共通点も見いだせた。